

Title	<論文>解体と構築のあいだ：レヅジョ・エミリアの幼児学校における学びの生成
Author(s)	宮崎, 薫
Citation	あいだ/生成 = Between/becoming (2012), 2: 29-46
Issue Date	2012-03-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/154739
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

解体と構築のあいだ

——レッジョ・エミリアの幼児学校における学びの生成——

宮崎 薫

はじめに

北イタリアの小都市レッジョ・エミリアにおける幼児教育は、1991年、ニューズウィーク誌で「世界で最も優れた教育」と称されて以降、多くの人々が関心を抱いている。そこでの幼児教育に関する展覧会「驚くべき学びの世界」展が、2011年、ワタリウム美術館で開催された（金沢、東京、京都を巡回）¹。教育実践を評価する指標は、さまざまあり、何をもって世界最高水準とするかは難しい判断であるが、精緻な実践記録を残し、世界各地で開催される展覧会において実践内容を公開し、多数の来場者を動員するという点では、レッジョ・エミリアの幼児学校における実践は、他に類を見ないと言えるだろう。

日本におけるこの度の展覧会は、2001年の「子どもたちの100の言葉」展から10年ぶりの開催である。前回の続編である今回の展覧会は、子どもたちの作品に加え、ドキュメンテーション、ビデオ等が多数公開され、実践内容の詳細を把握することができる。また、「一貫しながらも変容してきたレッジョの歴史と指導原理を示す²」ことが展覧会の主題であると掲げられている。展覧会の展示内容を検討することにより、レッジョ・エミリアの学びの生成過程を理解することが可能となるであろう。

本稿では、主に、「驚くべき学びの世界」展における展示内容を手掛かりに、レッジョ・エミリアの幼児学校における学びの生成を、多感覚性に着目し、検討していくこととする。

レッジョ・エミリアの幼児学校では、さまざまなフェーズにおいて、解体と構築という構造が見られ³、解体と構築のあいだで、学びが生成すると考える。第

1 「驚くべき学びの世界」展は、日本国内では、金沢（2011年3月25～30日、石川県行政庁舎19階）、東京（2011年4月23日～7月31日、ワタリウム美術館）、京都（2011年9月9～19日、元・立誠小学校）を巡回。

2 佐藤学監修 ワタリウム美術館編『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』ACCESS、2011、p.22

3 秋田喜代美は、「レッジョ・エミリアの教育学」（佐藤学・今井康雄編『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』東京大学出版会、2003 所収）の中で、「レッジョ・エミリアの実践は、アートか科学かではなく、それが生まれる源となる

1章では、幼児学校の学びの生成の全体像を明らかにし、第2章では、多感覚性に焦点を当てて、検討していく。最終的に、現代の学校に求められる感覚的な経験について考察を試みたい。

1. レッジョ・エミリアの幼児学校における学びの生成

1・1 幼児学校の起源

「創造性とは何か」との問いに、「戦車から学校を作ること」と、レッジョ・エミリア市の教育における思想的リーダーであったローリス・マラグッツイ(1920 - 1994) は述べている。1945年5月、ヴィラ・チェラという小さな村の住人が、捨てられた戦車や軍用トラックなどをスクラップして売って資金にし、農民から寄付された土地に、爆撃された家に残った煉瓦を運び、「自分たちの学校」を作り始めたことが、レッジョ・エミリア市の幼児学校の起源である。幼児学校の歴史を記している小冊子のタイトルは、『Brick by Brick』で、“brick”には、二つの意味が込められている。ひとつは、煉瓦のブロックを運び、積み上げ「自分たちの学校」を作ったこと、もうひとつの意味は、1ブロック(区域)毎にひとつの学校を作り、広げていったことである⁴。

レッジョ・エミリアの幼児学校は、その起源から、解体と構築という概念と結びついている。戦車を解体して得た資金から、「自分たちの学校」を構築するためには、大きな課題があった。イタリアの幼児教育は、伝統的にローマ・カソリック教会の統制下にあった。レッジョ・エミリアの幼児学校の歴史は、イタリアの公立の幼児学校の歴史でもあり、宗教的・政治的保守勢力との闘いは、1970年代まで続くこととなる。

ローリス・マラグッツイは、戦車から学校を作ろうとする住人と言葉を交わした日から、半世紀にわたり、レッジョ・エミリアの幼児学校の思想的リーダーであった。マラグッツイは、ピアジェが所長を務めるルソー研究所で発達心理学を学んだ経歴があり、ピアジェはもちろんのこと、ヴィゴスキー、デュイ、ワロン、フレネ、ブルーナー、ガードナー、フレイレといった20世紀の主要な心理学と教育学を統合し、独自のアプローチを創造し、実践した。

しかしながら、マラグッツイは、自身の教育理論や思想を記した書物を残していない。マリア・モンテッソーリの『モンテッソーリ・メソッド』やジョン・デュイの『民主主義と教育』というような教育学上の主著がないのである。マラ

解体と構築の操作が子どもたちの遊びのなかで十分に行われている」と述べている。秋田の指摘と先行研究を踏まえた上で、本稿では考察をする。

4 Brick by Brick, REGGIO CHILDREN, 2005

グッツイの後継者に相当し、レッジョ・チルドレン代表のカルラ・リナルディは、2011年に来日した際、「マラグッツイは、教育学でなくアプローチを残した⁵」と述べている。アプローチの表現形態も、書物ではなく、展覧会という形をとっている。リナルディは、前回の展覧会の図録の中で、次のように記している。

マラグッツイ教授の書いたものについて、量が少ないとか、レッジョの経験全般について書かれたものがほとんどないと言って残念がる人が少なくありません。「書いたもの」というのが、人の考えや文化を言葉で表現したものを意味するとすれば、この嘆きはもっともかもしれません。しかし「書物」という言葉をもっと広く解し、切り口（または掘り込み）という語源上の意味まで含めるのであれば、この展示は、教育的文化的な分野において最近数年間に著された最も切り口の鋭い「書物」にほかなりません。⁶

メソッドという完成形を提示し、それを忠実に再現されることを期待するのではなく、展覧会を見た者が、レッジョ・エミリアの幼児教育の取り組みを手掛かりに、自らの実践を創造していくことを、マラグッツイは期待していたのではないだろうか。書物から展覧会へ、そして、メソッドからアプローチへ、教育学における既存の提示形式を解体し、新たな提示形式を構築しようとしたと言える。

1・2 幼児学校の特徴

レッジョ・エミリアの幼児学校は、学校空間、教師、活動の3点が特徴的である。

学校空間は、「ピアッツア（広場）」と「アトリエ」を必ず有する。ヨーロッパの都市の中心に位置する「広場」と同じ名の「広場」は、学校内の共有スペースである。学校に設置された「広場」は、町と学校をつなぐ場所であると同時に、保護者と学校をつなぎ、異なる年齢の子どもたちが行き交う場所でもある。

「広場」と連結して「アトリエ」が設置されている。「アトリエ」には、紙、筆、絵具、葉、木の実、種、葉、小石、ボタン、ビーズ、ねじ、釘などさまざまな素材が、分類されて置かれている。3歳児、4歳児、5歳児、年齢毎の教室にも、「ミニアトリエ」がある。「アトリエ」の設置とともに導入されたのが「アト

5 カルラ・リナルディ（レッジョ・チルドレン代表）は、「驚くべき学びの世界」展の開催を記念し来日し、2011年7月15日イタリア文化会館アネッリホールにて講演を行った。

6 レッジョ・チルドレン（田辺敬子・辻昌宏・木下龍太郎訳）『イタリアレッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録 子どもたちの100の言葉』学習研究社、2001、p.111

リエリスタ」という大学で芸術を専攻した教師である。幼児学校には、「アトリエリスタ」に加え、「ペダゴジスタ」という大学で教育学を専攻した教師もいる。教師、「ペダゴジスタ」、「アトリエリスタ」が連携して教育活動を展開している。

レッジョ・エミリアの幼児学校は、「アートによる前衛的な学校」と形容されることが多いのは、「アトリエ」と「アトリエリスタ」の存在による。マラグッツイは、「アトリエ」に関して、次のように述べている。

アトリエは常に私たちの願いに応じてきました。アトリエは、望んだどおり破壊的であり、複雑さと新しい思考の道具を生みだしました。アトリエによって、子どものさまざまな（象徴的な）言葉に豊かな結びつきと創造的な可能性が生まれました。⁷

マラグッツイは、「アトリエ」が「創造的な可能性」を生んだと述べているが、レッジョ・エミリアの幼児学校の活動そのものや子どもたちの作品の評価では、創造性というキーワードが頻繁に用いられる。創造性に関わり、マラグッツイは、「私たちは、創造性を神聖なものとは考えていません。私たちは創造性を極端なものとは考えず、むしろ日常経験から生じるものと考えています⁸」と述べている。また、次のようにまとめている。

創造性は、子どもたちの百の言葉の扉を開いて、「知る学校」が「表現する学校」との結び目を見出すことを要請する。⁹

教師が子どもへ知識や技能を教授することを主体とした「知る学校」から、「知る学校」であると同時に「表現する学校」を構築する上で、創造性は、機能すると考えるのである。

幼児学校の3番目の特徴として、「プロジェクトツィオーネ（プロジェクト）」という一連の活動があげられる。教師は、「ドキュメンテーション」と呼ばれる実践記録を残している。「ドキュメンテーション」は、教師にとって子どもたちの学びの生成過程を確認ツールであると同時に、教師と教師をつなぐツールであり、親と学校をつなぐツールでもある。

7 C.エドワーズ・L.ガンディーニ・G.フォアマン編（佐藤学・森真理・塚田美紀訳）『子どもたちの100の言葉ーレッジョ・エミリアの幼児教育』世織書房、2001、p.110

8 同上、p.114

9 同上、p.115

「ドキュメンテーション」について、リナルディは、次のように述べる。

ドキュメンテーションは、大人たちや子どもたちのなかでのやり取りを目に見えるかたちで適切に示し、対話のある関係を築いていく拠り所とするためのものです¹⁰

今回の展覧会で紹介されている「プロジェッタツィオーネ」は、「場所との対話」、「影の物語」、「階段の声」、「白、白、白」、「音のシステム」、「光のなぞ」、「身体は語る」等である。場所、身体、光と影、色、音といった子どもたちにとって身近であり、哲学的な命題が、「プロジェッタツィオーネ」で取り上げられている。

1・3 「広場」としての展覧会

レッジョ・エミリアの幼児教育を紹介する最初の展覧会「壁の向こうをのぞいてみたら」展は、1981年、マラグッツイの発案で始まった。後の1987年、タイトルを、「子どもたちの100の言葉」展に変更し、展示内容の見直しをしつつ、2007年まで、20年間開催された。今回の展覧会は、前回の展覧会の続編に位置付けている。

レッジョ・エミリアの幼児学校は、参観者の受け入れを規制している。閉鎖的に映るが、子どもたちの学びを保障するという点においては、大切な姿勢である。その代り、展覧会という形式で、各国を巡回し、実践内容を公開している。展覧会を開催することは、批判的な意見を受容することでもあるが、結果的に、教育実践を進化させることにつながっていると言えるだろう。

今回の展覧会の大きな特徴は、民主的な「広場」として展覧会を提案したことを、明言している点である。イタリアの都市の中心に位置する「広場」は、レッジョ・エミリアの学校空間において特徴的であり、重要な概念であることは先に述べた通りである。そして、教育実践を紹介する展覧会も、また「広場」、すなわち対話の場所であることを志向する。

レッジョ・チルドレン国際連絡窓口を務めるアメリカ・ガンベッティは、展覧会について、次のように述べる。

展覧会は巡回することにより、複合的な状況を生み出し、交流、対話、経験

10 『イタリアレッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録 子どもたちの100の言葉』、前掲書、p.112

の共有を図るのに必要不可欠な価値である「差異」との対話を常に作り出しています。¹¹

展覧会は、自らの実践を語りながら、他者の意見に耳を傾け、「差異」を受け入れる場なのである。「差異」を受け入れることで、教育実践そのものも変化し、成長するのだろう。

それでは、展覧会に居合わせる人の内には、いかなるものが生成するのだろうか。展覧会について、図録では、次のように記されている。

この展覧会は、学びの文脈の大切さや、研究すること、連帯してものを見ること、ものごとを熱心さと共感をもって、関連づけること、美的経験への欲望を与える重要性を示す証拠となります。¹²

レッジョ・エミリア市幼児教育局主事のパオラ・カリアリは、学びの場において、子どもと大人を、「知識を構築する人」と見做していると言う¹³。展覧会に訪れるのは、主に大人たちである。大部分は、教育関係者であり、一部が、アート、デザイン、建築関係者である。展覧会に訪れる目的は、世界で注目されるレッジョ・アプローチの実践を知ること、子どもたちの学びの生成過程を知ることである。来場者の大部分は、恐らくそれらの目的を達成することだろう。さらには、「知識を構築する」場としても展覧会は機能しているのではないだろうか。

例えば、「書くことの魅力」をテーマにした展示内容に着目してみよう。ここでは、「記号を描くことと文字を書くことの間」にはどのような関係があるのか、「現実と表象の間にはどのような関係があるのでしょうか？」との問いが投げかけられている。子どもたちがどのようにアルファベットの探求をおこなっているかを記したプロジェクトで、「A」という一文字に着目する。「A」という文字で、子どもは、次のような言葉を発している。

Aを書くでしょ。みじかい線をとって、上と下をさかさまにしたらVになる。それから、とった線をこういうふうに加えたら矢になるよ。¹⁴

11 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.311

12 同上、p.24

13 同上、p.301

14 同上、p.171

「A」という文字を、解体して、「V」という文字へ、さらには、弓矢の絵を描くことへ、たどり着いている。「記号を描くことと文字を書くことの間」を行き来し、その過程で、「A」という文字と、「V」という文字の二文字を獲得している。

「A」という文字が、生まれてから死ぬまでの一生を表現した作品や「Aの家族」という作品もある。それらの作品は、絵にも見えるし、文字にも見える。記号と文字の間を自在に行き来することができるから生まれてくるのだろう。

子どもたちと文字の間に生成する出来事を前に、来場者は、既に持ち得ている文字の概念を、一度、解体することになるだろう。そして、再び、文字の概念を構築することになる。子どもたちが文字を獲得する過程を知ると同時に、自分自身も文字を獲得していくのである。

教育学者勝田守一（1908-1969）は、「子どもの感覚」（1954）中で、「子どもの感覚の中には、かれが生活の中で、生命といっしょに獲得した全人的な意識がひそんでいる」ことを認めながらも、「その後の形式的な学校教育の中で息をひそめてしまう」ことを指摘している。そして、「子どもの感覚のみずみずしさに目を見張るという経験をまじめに考えてみることから出直すこと¹⁵」の大切さを私たちに問うている。

展覧会は、訪れる大人が、「子どもの感覚のみずみずしさに目を見張る」場であり、既存の知識を解体し、「知識を構築する」場となり、「学びの装置」としても機能するのである。

2. レッジョ・エミリアの幼児学校と多感覚性

2・1 言葉と多感覚性

展覧会のタイトル「子どもたちの100の言葉」は、マラグツイの詩に由来する。

…子どもは百の言葉をもっている。（その百倍もその百倍もそのまた百倍も）けれども、その九十九は奪われている。学校の文化は頭と身体を分けている。…

（詩の一部）¹⁶

15 勝田守一「子どもの感覚」『勝田守一著作集』第四巻、国土社、1972、pp.64 - 65

16 『子どもたちの100の言葉ーレッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.4

「驚くべき学びの世界」展の展覧会の主題として、「子どもたちが人間として、知識の関係の旅のなかで変容し豊かになる『100の言葉』の大いなる可能性を認めること¹⁷⁾」を宣言されているが、レッジョ・エミリアの幼児教育で、最も力を入れているのが、言葉である。

展覧会の展示から、子どもたちの言葉を、いくつか拾い上げてみたい。

身体で聴くことができる。

それから目と耳と鼻でも、場所の香りも聴けるよ。

エリア

プロジェクトツィオーネ「場所との対話」¹⁸⁾

モノの音を聴くだけではなくて、その音を見なきゃいけない。

音はモノの声なんだ。

アレックス

プロジェクトツィオーネ「音のシステム」¹⁹⁾

この二つの言葉では、「香りを聴く」、「音を見る」というように、嗅覚と聴覚、聴覚と視覚というように、異なる感覚が結びついている。もうひとつ例をあげよう。

色は美しく、素晴らしい。

日陰の木の葉は青く、緑の香りがする。

日向では緑色で、黄色の香りがする。

プロジェクトツィオーネ「色を把握する」²⁰⁾

この言葉も、「黄色の香り」というように、視覚と嗅覚が結びついている。レッジョ・エミリアの幼児学校の子どもたちは、このように、ある感覚器官で感じた印象を、他の感覚器官で感じた言葉で表現している場面が多いのである。

異なる感覚の間を行き来し、結びつく言葉が生まれる学校空間について、次節では、検討していく。

17 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.24

18 同上、p.39

19 同上、p.137

20 『イタリア レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録 子どもたちの100の言葉』、前掲書、p.61

2・2 空間と多感覚性

レッジョ・エミリアの幼児学校の空間について、理解するために、レッジョ・チルドレンが建築家を中心としたドムス・アカデミーと共に、調査研究をした報告書『子ども、空間、関係性 幼児期のための環境のメタプロジェクト』を検証していく。

この報告書の中で、幼児期の子どもたちの学びの空間がどのような特徴を持つべきなのかということに関わり、9つのキーワードを挙げている。すなわち、「複雑な柔軟性」、「関係性」、「浸透性」、「多感覚性」、「後成説」、「コミュニティー」、「構築性」、「物語性」、「豊かな日常性」である²¹。

キーワードのひとつに「多感覚性」が挙げられている。「学校は感覚的知覚を励まし、育み、それらを洗練し、成熟させる場²²」でなければならないという見解を示し、「各器官の知覚を保持しつつ、多義性とバランス²³」が重要であると言う。「多感覚性」というキーワードについては、「共感覚」と関連付けながら説明がなされている。諸感覚を巻き込む「共感覚的な状態は、多くの作者にとって、子どもの感覚的しなやかさの典型的な生活条件を構成²⁴」すると言うのである。

色彩的、触覚的、嗅覚的、そして光の好みは、個人個人で変わり、主観的な相違により強く影響され、すべての人に共通の標準的な価値に言及できるものではありません。環境は、多感覚的な空間として、刺激が豊かでなければならないという意味ではなく、むしろ個人的受信に固有の特性にしたがって、各人が調和できると共に、多様な感覚的価値が備えられなければならないという意味に理解されなければなりません。²⁵

報告書『子ども、空間、関係性 幼児期のための環境のメタプロジェクト』では、「多様な感覚的な価値」を備えるために、ハードとソフトの両側面の検討がなされている。ハード面としては、第一章でも示した、「広場」や「アトリエ」の設置が指摘されている。ソフト面では、光、色彩、素材、音、におい、微気候の6項目をあげ、各々、設計上の指標が記されている。ソフト面の具体的な記載を見ると、空間の中に、感覚の風景を作り出そうとしていることが、「光の風

21 レッジョ・チルドレン/ドムス・アカデミー・リサーチセンター（田邊敬子訳）『子ども、空間、関係性 幼児期のための環境のメタプロジェクト』学習研究社、2008、pp.12 - 29

22 同上、p.18

23 同上、p.19

24 同上、p.18

25 同上、p.19

景]、「色の風景」、「音の風景」、「においの風景」、「素材の風景」という言葉から、理解できる。さらに、各々の風景において、多様性、可変性、複合性、操作性への配慮がなされるのである。

例えば、「光の風景」の中では、多様性を生み出すために、日光と人工の光の両方を取り入れている。人工の光源としては、映写機、オーバーヘッド・プロジェクター、ライトテーブル、パソコンのモニター、鏡など、既成の概念にとらわれることなく、多数扱われている。また、子どもたちが自ら光の強度や明度を、調節できるよう配慮されている。子どもたちは、光を操作する中で、光に関わる経験が生成するのである。

風景のひとつに、「素材の風景」がある。「素材」と「風景」を結びつけた表現は、独特である。次節では、素材を中心に見ていくこととする。

2・3 素材と多感覚性

レッジョ・エミリアの幼児学校では、空間と共に、素材が重要視されている。端的に表している言葉を次に引用する。

作業の空間は最初に「デザイン」される対象です。そしてその空間は、素材、さまざまな支援、そしてさまざまな書き方を子どもたちが自由に用いて試行錯誤ができるようにアレンジされました。私たちは、素材そのものが心のなかのイメージとコミュニケーションの発生装置である、と考えています。²⁶

描画や造形の方法として、素材があるのではなく、素材をイメージの発生装置と考える幼児学校の「アトリエ」には、百を超える素材が、種類毎に分類され整然と用意されている。素材は、木の実、種、葉といった自然のものに加え、ねじ、釘、ボルトなど人工物がある。レッジョ・エミリアに、1996年、クリエイティブリサイクルセンター「レミダ」がオープンした。このセンターには、地域の企業や工場で廃棄された資材が展示され、学校等に資材は提供される。幼児学校の「アトリエ」の素材の中には、「レミダ」から提供されたものもあるだろう。

素材に関わるプロジェクト「モノと自然の間」に着目してみよう。この活動では、まず、子どもたちは、公園で、木の実や葉、石、土といったモノを集める。それを、学校に持ち帰り、区分してトレーに納める。配列されたモノは、さまざまな色、形、香り、手触りがする。次に、集められたモノを、小片にし、ふるいにかけて、粉々にし、「モノのパレット」を作る。モノは解体され、色

26 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.169

や形、香り、感触が変容していく。この作業の後、再び公園に行く。その後、「モノのパレット」を用いて、絵を描く。作品には、「砂とバラの輪」、「都市の作品」といったタイトルがつけられている。子どもたちは、自ら解体したモノから、作品を構築する作業のあいだで、「モノと自然の間」を行き来し、モノの本質を認識するという学びが生成している。また、モノの解体作業では、形、色、香りを同時に解体することになる。解体されたモノを使って、作品を創作する作業では、新たな形、色、香りが生まれる。こういった素材の操作を通じて、多感性が育まれると考えられる。

プロジェクトツィオーネでは、「実験」という表現が頻繁に用いられている。例えば、「文字と言葉の実験」、「音の実験」というような表現である。「実験」という言葉について、次のように説明されている。

実験とは、新しいものを得るためにまぜ合わせること、予想を形にすること、発明すること、想像すること、創造すること、変容させることを意味します。²⁷

プロジェクトツィオーネでは、さまざまな「実験」がなされ、その結果、いろいろなモノが「発明」される。「音の彫刻」というプロジェクトツィオーネでは、「音のシステム」と名づけた楽器が、「光の通り道」では光をつかまえるマシンが、「発明」されている。「匂いを集めて変える機械」というものもある。「発明」は、新たな機械を作るだけでなく、文字の書き方といった「きまり」を作る場合もある。書き方の「きまり」を習うのではなく、自ら「きまり」を作るのである。

「発明」という言葉に関連して、「再発明」（イタリア語で“reinventare”）という表現もなされている²⁸。新たなものを「発明」することもあれば、既存のものを作り直して、新たなものを作り出す「再発明」もある。「再発明」という言葉は、解体と構築のあいだに、学びが生成するというレッジョ・エミリアの学びの様相を端的に表した言葉と言える。

続いて、「音の彫刻」というプロジェクトツィオーネを検討してみたい。「音のシステム」を作るために、まず、弦の素材を集めることから始める。弦の素材として、鉄、布、ワイヤーといった素材から、どんな音が生まれるか、音の実験がなされる。その後、「音のシステム」を支える素材を探す。遠足の途中で見つけ

27 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.176

28 Lo stupore del conoscere I cento linguaggi dei bambini, REGGIO CHILDREN,2011, p.98

た木の枝を、楽器の支えに使うことにする。楽器を組み立て始める前に、デザインのためのスケッチが描かれる。この作業の中で、次のような言葉が生まれている。

モノの音を聴くだけではなくて、その音を見なきゃいけない。音はモノの声なんだ。 アレックス²⁹

これは、こすれたドレッサーのような音、穴のあいた音、硬い音や柔らかい音だよ。

ぼくはボルトを使った。音楽的だし、簡単に鳴るからね。 マルコ³⁰

「音を見る」、「穴のあいた音」というように、聴覚と視覚という異なる感覚が結びついた言葉が、生まれている。「音のシステム」の制作過程で、形や手触りの異なるさまざまな素材を扱い、形が変われば音が変わることを経験したことで、「音を見る」という言葉が生まれているのだろう。

「素材そのものが心のなかのイメージとコミュニケーションの発生装置」と考えるレッジョ・エミリアの幼児学校で、用意される素材は、色、形、手触り、香り、音、味が異なる多様な素材である。それらの素材を解体したり、構成する作業は、異なる感覚に同時に働きかける作業でもある。素材を解体し、構成する作業のあいだに、多感覚性が生成するのだろう。

おわりに——“五感の分裂”と学校における感覚的経験

第2章では、レッジョ・エミリアの幼児学校を多感覚性に着目して検討をしてきた。最後に、レッジョ・エミリアの実践を踏まえつつ、現在の学校に求められる感覚的経験について考えてみたい。

幼児期における豊かな感覚的経験の重要性については、異論を唱える人は恐らくいないだろう。歴史を遡れば、ジョン・ロック、コンディヤック、ジャン・ジャック・ルソー、コメニウス、ペスタロッチ、フレーベルといった各時代の哲学者、教育学者が、問題意識を抱いてきた。周知の通り、ルソーは、『エミール』（1762）の中で、子どもの教育内容に感覚を取り上げている。同時期、近代体育の父と言われるドイツのゲーツムーツ（1759-1839）は、主著『青少年の体育』（1793）の1章を「感覚の訓練」に充てている。その流れの中で、20世紀初頭、

29 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.137

30 同上、p.139

イタリアのマリア・モンテッソーリ（1870 - 1952）は、「感覚教育」の方法と原理を明確に打ち出した。

レッジョ・エミリアの幼児学校をはじめ、イタリアにおける学校教育を考える上で、モンテッソーリの存在は、外すことができない。イタリアのみならず、19世紀末葉から20世紀初頭にかけて、各国で展開する新教育運動で、中心に位置付くのは、シカゴ大学附属小学校の開設に関わったジョン・デューイ（1859-1952）と、ローマに「子どもの家」を開設したモンテッソーリである。モンテッソーリの最初の著書、『子どもの家における幼児教育に適用された科学的教育学の方法』（1909）は、二十数か国語に翻訳され（英訳名『モンテッソーリ・メソッド』）、各国の教育界に衝撃的な影響を与えた。モンテッソーリの独自の概念は「感覚教育」であった。厳格に定められた教具を用いて、五感の各々の感覚を訓練する「感覚教育」に対しては、「すべての子どもに必要か」という厳しい批判が初期の段階からあったが、現在でも、各国に、メソッドを採用した幼稚園があることから、モンテッソーリの教育方法の賛同者は多いことは推し量ることができる。

それでは、レッジョ・エミリアの幼児学校に関わる人々は、モンテッソーリをどのように受け止めているのだろうか。マラグッツイは、インタビューの中で、「イタリアの伝統は、ローザ・アガッツイとマリア・モンテッソーリにあり、この二人は今世紀初頭からの重要人物」であると述べている。さらに、「私は今でもモンテッソーリとアガッツイの著作は、それらを超えるためにも熟考されるべきだ³¹」と続けている。この言葉から、明らかなように、モンテッソーリは、「超える」対象なのである。レッジョ・エミリアの幼児学校では、モンテッソーリが定めた教具のようなものは存在しないし、五感の個々の感覚に着目して意識を払うことはあっても、訓練はなされていない。

幼児学校の原型ができる1960年代に、マラグッツイらが文献研究をし、影響を受けた中のひとりとしてジョン・デューイが挙げられている。デューイは、著書『経験としての芸術』において、イギリスの小説家のW.H.ハドソンの文章を引用しつつ、感覚的性質について言及している。ハドソンの文章の中で、デューイは、「カント以来の学者たちがとってきた臭・味・味覚といった感覚的性質に対する傲慢」な態度をとってないこと、さらには、「『色・香り・味・触覚』をバラバラに切りはなしたりはしない³²」ことを注目している。

ハドソンに対するデューイの見解は、感覚的性質に関わるデューイ自身の態度

31 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.87

32 ジョン・デューイ（栗田修訳）『経験としての芸術』晃洋書房、2010、p.152

でもある。すなわち、「個々の感覚が別個に働くのではない」と考えるのである。この点に関わり、詳しく述べている箇所を次に引用する。

たしかに、ひとつの感覚器官の積極的な作用が、感覚的性質を作りだすのにかかわるのは事実である。しかし、だからといって、その感覚器官が意識的経験の中心となるのではない。なぜなら、意味のあるすべての経験において、感覚的性質と事物とはほんらい結合しているのだから、もしこの結合を取りさるならば、後に残るのはただ意味もなく、また得体もしれず、次々を現れては消えるぞくぞくとした感じだけだ。³³

レッジョ・エミリアの幼児学校の実践では、多感覚性に意識が払われている。それは、デューイの「個々の感覚が別個に働くのではない」という態度と重なるのである。

幼児学校の概念形成がなされた1960年代後半、アメリカや日本、恐らくヨーロッパでも旋風を巻き起こしたであろうマーシャル・マクルーハン（1911 - 1980）は、『ゲーテンベルクの銀河系』（1962）において、デューイを次のように評価している。

われわれの時代にあって、教育を未開社会の印刷以前の局面までもどそうと試みたひとがジョン・デューイであった。デューイは学生たちを揃いの包装にパッケージされた教科の消費者という受動的な立場から救い出したかったのだった。³⁴

マクルーハンは、『ゲーテンベルクの銀河系』の中で、デューイと16世紀のフランス人ピエール・ド・ラメ（1515 - 1572）との対比を試みている。マクルーハン、ピエール・ド・ラメについて、印刷本を用いた視覚的教育プログラムを適用し教育改革を行った巨星と説明している。印刷本は、ティーチング・マシーンに相当すると、マクルーハンは言うのである。つまり、ゲーテンベルクが発明した活字印刷術がもたらした印刷本は、画一的な教育を可能としたと主張するのである。

18世紀のドイツで「感覚の訓練」を行ったグーツムーツには、ひとりひとりの

33 『経験としての芸術』、前掲書、p.152

34 マーシャル・マクルーハン（森常治訳）『ゲーテンベルクの銀河系 活字人間の形成』みすず書房、1986、p.221

「感覚の誤り」を正すという発想が根底にあった。その発想は、感覚のみならず身体の一画一化へとつながるものでもあった³⁵。そして、厳格な教具を用いたモンテッソーリの「感覚の訓練」もまた、感覚や身体の一画一化といった危険性をはらんでいる。

マクルーハンは、デュイを画一的な教育から子どもたちを救い出したと評価したのであるが、『ゲーテンベルクの銀河系』におけるマクルーハン自身の問題意識は「五感の分裂」に向けられていたのではないだろうか³⁶。「五感の分裂」に関わる、マクルーハンの言葉をいくつか引いてみよう。

道具を作る動物である人間は、音声、文字、ラジオ等々、いずれの手段を用いて語ろうが、いずれにせよ自分たちの感覚器官のどれかをひとつ拡張しているわけであって、その結果、拡張されなかったその他すべての器官とその機能を攪乱しつづけてきた、といえよう。³⁷

アルファベットの発明以来、西欧世界は、五感の分裂、人間の機能、活動、感情、そして政治状況や、職務の分裂、つまり、デュルケームが十九世紀の〈社会的秩序〉と考えた状況に終わった分裂化に向かってひた走りに走った。³⁸

マクルーハンは、文字やラジオといった道具の発明は、どれかひとつの「感覚を拡張」し、その結果、本来は相互に作用していた諸感覚は閉鎖体系となり、「五感の分裂」につながったと言うのである。

もうひとつのマクルーハンの関心は、人間の感覚比率であった。ウィリアム・ブレイク（1752-1827）の詩を引用し、人間の感覚比率は、時代や文化によって大きく変化し、そのことで、人のあり様も変わるということを、マクルーハンは述べている。

「五感の分裂」や視覚的教材の適用による教育の一画一化といったマクルーハン

35 山本徳郎は、「グーツムーツの感覚訓練 - 18世紀末ドイツ体育への一考察」（『奈良女子大学大学院人間文化研究科年報 四号』1988 所収）の中で、グーツムーツの感覚訓練を検討した上で、近代の教育は「『感覚の誤り』を正し、人間をできるだけ機械的な測定（できる）値へ近づけようという努力が進められてきた」と主張している。

36 富永茂樹は、「《マクルーハン》とはなんであったか」（『転回点を求めて— 1960年代の研究』世界思想社、2009 所収）の中で、「五感の分裂こそがマクルーハンの近代合理主義にたいする懐疑の根底にある」と指摘している。

37 『ゲーテンベルクの銀河系 活字人間の形成』、前掲書、p.7

38 同上、p.69

の問題意識を踏まえて、現在の学校において、どのような感覚的経験が求められているかを考えてみると、多感覚的な経験が重要となるであろう。また、視覚の優位化による「五感の分裂」から回避する上で、味覚や嗅覚にも着目した実践も取り入れる必要があるだろう。

レッジョ・エミリアの幼児学校の実践を示したこの度の「驚くべき学びの世界」展では、「アイデアのあれこれ」という名称で、23のプロジェクトオーネが提案されている³⁹。そこには、新たな方向性の萌芽が見いだされ、テーマは、数学的な能力、デジタル言語、そして、多感覚的な制作まで、広く設定されている。感覚に関わるものでは、「音の風景」、「空気の世界」、「香水の庭」、「匂いを集めて変える機械」、「香りをたどる一鼻のなかに世界がある」がある。いずれも、聴覚や嗅覚といった個々の感覚器官にのみ働きかけるのではなく、複数の感覚に対する多感覚的な実践となっている。

レッジョ・エミリアには、新たに「味覚のアトリエ」が設置される。その中で、“multisensory kitchen”⁴⁰ すなわち、「多感覚的調理場」が提案されている。新しいアトリエ、「味覚のアトリエ」は、味覚を含めた五感すべてに働きかける多感覚的な「実験」が実現する場となるだろう。“multisensory kitchen”は、「もし、私たちが新しいタイプの学校類型を創造して、これまで以上に仕事を前進させようとするならば、新しい学校は完璧にアトリエと同様の実験室にするでしょう⁴¹」と言ったマラグツツイの目指した新たな学校の姿とも重なる。

教育学者佐藤学(1951 -)は、レッジョ・エミリアの幼児学校の最大の特徴を、「アートの創造的経験によって子どもの潜在的可能性を最大限に引き出しているところにある」⁴²と言う。アンリ・ベルクソンは、「変化の知覚」の中で、芸術により「知覚の拡張」が可能だと主張する⁴³。そして、それは、芸術家という限られた者にとどまるのではなく、万人にも開かれていることを示唆している。レッジョ・エミリアの幼児学校における「アートの創造的経験」は、子どもたちのみならず、居合わせる大人たちにもまた、「知覚の拡張」をもたらす可能性があることを提示している。

レッジョ・エミリアの幼児教育は、感覚や身体の一画化といった問題を孕んできた学校そのものを解体しようとする実践でもある。そして、その実践は、解体と構築のあいだを常に行き来し、完成という形はなく、これから先も新たなアイ

39 Browsing Through Ideas, REGGIO CHILDREN, 2009

40 The Languages of Food, REGGIO CHILDREN, 2008, p.14

41 『子どもたちの100の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.110

42 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』、前掲書、p.8

43 アンリ・ベルクソン(河野与一訳)『思想と動くもの』岩波文庫、1998

デアが提案されるのであろう。

【参考文献】

■展覧会関係

- 〈レッジョ・チルドレン発行カタログ イタリア語版〉
 I cento linguaggi dei bambini, REGGIO CHILDREN, 1996
 Lo stupore del conoscere I cento linguaggi dei bambini, REGGIO CHILDREN, 2011
 〈公式カタログ 日本語版〉
 レッジョ・チルドレン (田辺敬子・辻昌宏・木下龍太郎訳) 『イタリア レッジョ・エミリア市の幼児教育実践記録 子どもたちの 100 の言葉』 学習研究社、2001
 佐藤学監修 ワタリウム美術館編 『驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育』 ACCESS、2011

■レッジョ・チルドレン出版物

- Reggio Children Domus Academy Research Center, bambini, spazi, relazioni-metaprogetto di ambiente per l'infanzia, Reggio Children, 1998
 レッジョ・チルドレン/ドムス・アカデミー・リサーチセンター (田辺敬子訳) 『子ども、空間、関係性 幼児期のための環境のメタプロジェクト』 学習研究社、2008
 Advisories, REGGIO CHILDREN, 2002
 Brick by Brick, REGGIO CHILDREN, 2005
 Bringing Through Ideas, REGGIO CHILDREN, 2009
 Children Art Artists, REGGIO CHILDREN, 2004
 Dialogues with Places, REGGIO CHILDREN, 2008
 The Languages of Food, REGGIO CHILDREN, 2008
 Reggio Children Project Zero, Making Learning Visible, REGGIO CHILDREN, 2001

■レッジョ・エミリアの幼児学校関係

- 秋田喜代美 「レッジョ・エミリアの教育学」 佐藤学・今井康雄編 『子どもたちの想像力を育む アート教育の思想と実践』 東京大学出版会、2003
 田辺敬子 「子どもの楽園見つけた」 堀真一郎編 『世界の自由学校』、麦秋社、1985
 田辺敬子 「レッジョ・エミリア市の幼児教育」 『教育学年報7 ジェンダーと教育』 世織書房、1999
 C.エドワーズ・L.ガンディーニ・G.フォアマン編 (佐藤学・森真理・塚田美紀訳) 『子どもたちの 100 の言葉—レッジョ・エミリアの幼児教育』 世織書房、2001
 『pen No.175』 阪急コミュニケーションズ、2006
 ジャンニ・ロダーリ (窪田富男訳) 『ファンタジーの文法 物語創作法入門』 筑摩書房、1990
 Carlina Rinaldi, In Dialogue with Reggio Emilia, Routledge, New York, 2006
 Veà Vecchi, Art and Creativity in Reggio Emilia, Routledge, New York, 2010

■教育史・教育哲学関係

- 今井康雄 『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想—メディアのなかの教育』 世織書房、1998
 ウィリアム・ボイド (中野善達・藤井聰尚・茂木俊彦訳) 『感覚教育の系譜 ロックからモンテッソーリへ』、日本文化科学社、1979
 上野浩道 『知育とは何か』 勁草書房、1990

- 上野正道『学校の公共性と民主主義 デューイの美的経験論へ』東京大学出版会、2010
梅根悟監修『世界教育史体系 13 イタリア・スイス教育史』講談社、1977
勝田守一「子どもの感覚」『勝田守一著作集』第四巻、国土社、1972
ジョン・デューイ（栗田修訳）『経験としての芸術』晃洋書房、2010
長尾十三編『新教育運動の理論』明治図書、1988
グーツムーツ（成田十次郎訳）『青少年の体育』明治図書、1979
早田由美子『モンテッソーリ教育思想の形成過程』勁草書房、2003

■他

- 篠原資明『言の葉の交通論』五柳書院、1995
篠原資明『ベルクソン—くあいだ—の哲学の視点から』岩波書店、2006
ジョン・ハリソン（松尾香弥子訳）『共感覚 もっとも奇妙な知覚世界』新曜社、2006
富永茂樹「『マクルーハン』とはなんであったか」富永茂樹編『転回点を求めて— 1960年代の研究』世界思想社、2009
アンリ・ベルクソン（河野与一訳）『思想と動くもの』岩波文庫、1998
マーシャル・マクルーハン（森常治訳）『ゲーテンベルクの銀河系 活字人間の形成』みすず書房、1986
マーシャル・マクルーハン（南博訳）『メディアはマッサージである』河出書房新社、1995